

ダブルバインド

2020. 4. 27

文化人類学者のグレゴリー・ベイトソンという方が、「ダブルバインド」という考えを述べている。

例えば、母親が子どもに対して、「お前は、良い子だね」と言う。しかし、もし、そのとき、母親が、冷淡な表情でその子どもを見ていたならば、その子どもはとても不安な心境になるだろう。

それは、その「言葉」が伝えてくる受容のメッセージと、その「表情」が伝えてくる拒否のメッセージが矛盾しているように感じるからではあるまいか。そして、そのような矛盾した状況から逃げられないとき、我々は精神的な病を抱えることになるかもしれない。

これが、ベイトソンが「ダブルバインド」（二重拘束）と名づけた状況である。この考えを広げてみるならば、このようなダブルバインド的メッセージは、我々の身のまわりに溢れている。

例えば、街角のファーストフード店において、「いらっしやいませ」と歓迎してくれる店員さんの目は笑っていない。例えば、会社の職場において「君には期待しているよ」と励ましてくれる上司の声が醒めている。

こうしたダブルバインド的なメッセージが、今の社会には溢れているような気がする。我々は、「ことば」と「こころ」が離ればなれになってしまった時代を生きているのだろうか。

このことは、学校でも起こり得る。教師が生徒を褒めることはよくある。しかし、褒められても生徒があまり喜ばないことがある。生徒は、本気で褒めてくれているのかどうかを敏感に感じ取るのである。教師が、本当にそう思っているのか、心から自分のことを褒めてくれているのか、瞬時に判断する。

褒め上手な教師を見ていると、表情豊かにかからだ全体でその生徒のことを褒めているように思える。生徒の方もついニコツとしてしまう。なぜそうできるのか。きっと、その生徒のことをいつも気かけ、よく見ているのである。その生徒を何とかしたい、こうなってほしいと思うから、タイミングよく褒めることができるのである。

学校は、生徒と教師の関係だけではない。教師と教師の関係もある。最もわかりやすいのは教師と校長の関係である。私としては、けっこう本気で先生方を褒めるのだが、どうも反応がよくないことがある。ひどいときには「どうしたんですか」と言われてしまう。たぶん私のメッセージがダブルバインド的なのである。確かに表情豊かにかからだ全体で褒めているかというところでもない。大人相手なので、さすがに抑え気味になる。それこそ本気で表情豊かにかからだ全体で褒めたりしたら、「大丈夫ですか」と言われてしまうだろう。

私と先生方との関係性もポイントである。信頼関係もないところに褒められても「お世辞」にしか聞こえないかもしれない。そもそも私は、お世辞を言うタイプではない。だから、褒めているときは本当に心から褒めている。きっといつの日かどの先生にも自分の思いが伝わると信じて、これからは先生方のことをいつも気かけ、感謝しながらよく見るようにしていきたい。